

平成29年4月30日(日)

老球の細道323号

## 4月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

残雪の磐梯山と飯豊山を眺めながらのジョギングは最高である。道端に桜の木が自己主張する。このような時、決まって頭の中にはメロデーが流れる。小学校の時に見ていたドラマ『記念樹』主題歌である。馬淵晴子が主演だった。「♪桜の花が大きく育つとき 僕らはみんな大人になるんだ♪」。桜は人生の門出、節目を示してくれる。あと何年生かれるかではなく、あと何回桜を見れるかと考えたら今年の桜はまた格別だった。

### 1・ある時ふと

#### ◆「“気にする”ことを気にしない」

年をとると毎日が健康不安との戦いである。特に私は血圧、腰痛、胃炎等ストレス系が目白押しに起こってくる。ものの本によると「気にする」ことは人類が危険から身を守るために得た生活の知恵、身体の知恵だというのが、気にしないことに決めた。

### 2・読書から

◆「人生とは、他者との競争ではなく、“理想の自分”を追い求めるたびである。そして他者とは、打倒すべき敵ではなく、強調すべき仲間なのだ。対人関係を“競争”の軸で考えている限り、我々は不健全な劣等感から抜け出せなくなってしまう」

〈『スポーツグラフィック・ナンバー』4月27日号〉

ジョン・ウッデンも「成功」の哲学で言っていた。成功とは他人との競争ではない。他人は変えることができない。自分を変えることができる。したがって、最高の自分を目指して最高の努力をする自分との競争が大切だと。「敵は我にあり」。

◆「ある男が川の向こうに住んでおり、彼の主君と私の主君が争っているというので、私はその男と少しも争っていないのに、彼に私を殺す権利があるということほどこっけいなことがあるか」〈『人類の知的遺産・パスカル』のパンセから〉

急に北朝鮮情勢が悪化してきた。Bリーグディレクター連絡に北朝鮮ミサイルが日本に発射された時の試合の続行是非について記されていた。全ての選択肢はテーブルの上にあるそうだが、私たちはコートの中にある。トランプのジョーカーだけは引かないでほしい。

◆「子育てには“家族哲学”を持つこと。授かったわが子をいかに社会に送り出すか。例えば“楽しむ”“感謝”“挑戦”“思いやり”などの哲学をを持つ。哲学という軸ができることで常に根本に変えることができます。軸からぶれていると思ったら戻ればいい」

〈日体協雑誌『スポーツジャパン』2017年3-4月号〉

コーチは3つの哲学を持たなければならないと言われる。人生哲学、コーチング哲学、バスケットボール哲学。哲学を明確にすることによって、目的、スタイルがぶれない。

### 3・新聞等のコラムから

◆「よのなかは“こども”と“もとこども”でできている」〈朝日新聞・折々のことば・富安陽子〉

ミニバスケットの子どもたちや孫たちと向き合っていると自分も元悪ガキだった頃を思い出す。忘れてはいけない、感動する力、好奇心と集中力、ぐじゅぐじゅの未熟さ。常に新鮮な気持ちで何事にも立ち向かうために。歳をとることはまた子どもに戻っていくこと。